

I 堀江典生教授が地域研究コンソーシアム賞受賞

地域研究コンソーシアムは、世界諸地域の研究に関わる研究組織、教育組織、学会、そして地域研究と密接に関わる民間組織など現在 93 組織が加盟する地域研究のアカデミック・コミュニティです。地域研究コンソーシアムでは人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図るうえで、大きな貢献のあった研究業績に地域研究コンソーシアム賞（研究作品賞）を授与しています。



写真1. 受賞対象となった堀江典生編著の書籍。

本年度、本センター堀江典生教授が、編著『現代中央アジア・ロシア移民論』（ミネルヴァ書房）を受賞作品として地域研究コンソーシアム賞（研究作品賞）を受賞しました。労働移民に密着したアプローチによってロシアが抱える移民問題の重要性と深刻さを浮き彫りにするとともに、ロシアならびに中央アジアの移民問題を包括的に取りあげることによってこの地域の移民問題への関心を喚起し、地域研究、経済学、人口学、社会学、安全保障学等の専門家と国際機関の実務家からなる国際的共同による新たな地域研究のスタイルを切り拓く好事例であったとの評価を受けました。

（文責：和田）

II 「富山県と対岸諸国との物流」シンポジウム開催

2011年11月21日（月）、国際会議場にて、富山県の後援のもと、富山大学・極東地域研究センターが主催した「富山と対岸諸国との物流」が開催されました。3月11日の東日本大震災の後、

太平洋側の物流が滞ったことから、日本海側の物流が見直され、さらに平成22年11月から検討されていた「日本海側拠点港」の発表が平成23年11月11日にあり、伏木富山港が「総合拠点港」に選ばれるというタイミングで、このシンポジウムを開催することができました。

基調講演では、「日本海側拠点港」検討委員の一人であり、神奈川大学の中田信哉教授による「物流拠点再配置と日本海側港湾の位置づけ～北東アジアとの国際物流に関係して～」と題した講演では、震災後の物流の問題や「日本海側拠点港」選定の裏話(?)とその意味をお聞きしました。

このほか富山大学・経済学部の李瑞雪准教授が「港湾物流企業の新展開：輸出入業務の支援者からグローバルサプライチェーン連結者へ」と題した講演を、また韓国・仁荷大学・静石物流通商研究院のお二人の研究教授による講演（全宰完「グローバル生産ネットワークの変化に伴う物流ネットワークの強化」および金亨根「北東アジア地域物流ネットワーク及び進出方案」）がありました。



写真2. 中田信哉教授（神奈川大学）による基調講演。

氷雨模様の天候にも係わらず30余名の参加者を得、熱心な質疑応答がありました（講演の内容とその他の研究報告もあわせた報告書を2012年3月に発行予定）。

（文責：今村）

III 研究紹介 (3) — 研究員・李点順 —

今年4月から極東地域研究センターで働くことになった私は、これまで雇用関係と経済成長との関連について制度論的観点から研究を進めてきました。その延長線上で、最近では複雑多岐にわたる格差拡大の問題に興味を持つようになりました。今や世界各国で所得格差、賃金格差、雇用格差、地域間格差、教育格差、情報格差など多方面で格差の拡大が危惧されています。よって、各国はこれらの問題を放置した場合、格差問題は一層深刻化し、社会的、経済的さらには政治的な負

担をも増大させるという認識を持って、政策的な対応を始めています。

また、グローバル化の時代では、一国内、一地域内の問題はその国だけに留まらず、他国や他地域に影響を及ぼすこととなります。とりわけ2008年9月のリーマンショックによる世界経済の落ち込みの中で、近接アジア地域としての協力の重要性の認識が高まっています。たとえば、東アジア共同体の形成、日中韓でのFTA締結に向けた動きなどがそれです。東アジア諸国の間にみられる経済的多様性を認めつつ、経済の制度的統合を進めていく上では、域内における市場経済と格差は正の間の適切なバランスを考えていくことが重要でしょう。

そこで今、各国の格差問題への対応を含め、格差に大きな影響を与える各要素間の関係を検証することにより、経済成長と格差の関係を多面的に捉えようとしています。まずその第一歩として、所得格差が生み出す教育格差に注目し、様々なデータを用いて、日韓両国の教育格差の現状について検討している最中です。

(文責：李)

IV 英国便り：Being at “Far West” (1)

山本雅資

2011年9月より1年間の予定で英国にて研究活動を行っています。ノッティンガム大学経済学部にお世話になってまだ2ヶ月しかたっていませんが、日本の大学と比較して興味深い点をいくつかご紹介したいと思います。第一に、教員の国籍がさまざまであることがあります。イギリス人の教員はマイノリティです。経済学は世界的に標準化が進んでいるためと思われませんが、欧州系の教員は国を問わず非常に多く、日本、中国などアジア系の教員も在籍しています。研究者(博士課程の学生)が選択する研究テーマはオリジナルであるべきですが、日本の大学の国際競争力を考えると、少なくとも学部教育までは世界標準の経済学がどのようなものであるかをタイムリーに正しく伝えていくことの重要性をあらためて痛感しました。



写真3. ノッティンガム大学キャンパスにて。

次に国際的な人材交流が非常に活発であるという点です。ノッティンガム大学経済学部では少なくとも週に1度はセミナーが開かれ、イギリス国外から来る例も少なくありません。こうした情報交換の場は大変刺激的で生産性向上に大いに役立っていると感じます。



写真4. クリスマス点灯式で賑わう市内中心部。

最後に、やや些末なことではありますが、無線LANの充実があります。eduroamという仕組みがあり、英国内の大学であれば、ほぼどのキャンパスへいっても無線LANにアクセスできるというものです。日本でもeduroam.jpという取組がはじまっているようですので、今後の充実に期待したいと思います。

(文責：山本)

V 地域研究四方山話 (3)

ざっくりわければ中国では北方が小麦文化圏、南方がコメ文化圏である。今回は小麦粉を食する話である。まずラーメンの話。はじめて中国に行ったとき、「本場のラーメンを食べるぞ」と注文したら供されたのは日本の感覚でいえばうどんであった。中国の拉麺とは「拉(ひっぱる)」麵、すなわち小麦粉をこねたものを手で引き延ばして細くする(1本が2本に、2本が4本にと段々細くしていくもの)麵なのである。

餃子は日本では「おかず」であるが、中国では主食である。始めて街の食堂で餃子を頼んだときのこと。「何斤(1斤=500g)ですか?」と尋ねられ、「何故個数ではなくて、重さの単位なんだ?」とうろたえたのだが、よくよくきいてみると餃子の皮に使う小麦粉の分量をきいたとのこと。だいたい1斤で30個くらいとのことだった。主食で食する場合は水餃子(ゆでたもの)が一般的である。餃子の餡もたくさんの種類があるので、「半斤は〇〇で、半斤は〇〇で」と幾つかの餡を注文して味の違いを楽しむのも一興である。

(文責：今村)